

# 少女病

田山花袋

青空文庫



山手線の朝の七時二十分の上り汽車が、代々木の電車停留場の崖下を地響きさせて通るころ、千駄谷の田畝をてくてくと歩いていく男がある。この男の通らぬことはいかな日にもないので、雨の日には泥濘の深い田畝道に古い長靴を引きずっていくし、風の吹く朝には帽子を阿弥陀にかぶって塵埃を避けるようにして通るし、沿道の家々の人は、遠くからその姿を見知って、もうあの人を通ったから、あなたお役所が遅くなりますなどと春眠いぎたなき主人を揺り起こす軍人の細君もあるくらいだ。

この男の姿のこの田畝道にあらわれ出したのは、今からふた月ほど前、近郊の地が開けて、新しい家作がかなたの森の角、こなたの丘の上にでき上がって、某少将の邸宅、某会社重役の邸宅などの大きな構えが、武蔵野のなごりの櫟の大並木の間からちらちらと画のように見えるころであったが、その櫟の並木のかなたに、貸家建ての家屋が五、六軒並んであるというから、なんでもそこらに移転して来た人だろうとのもっぱらの評判であった。何も人間が通るのに、評判を立てるほどのこともないのだが、淋しい田舎で人珍しいの

と、それにこの男の姿がいかにも特色があつて、そして驚あひるの歩くような変てこな形をするので、なんともいえぬ不調和——その不調和が路傍の人々の閑ひまな眼を惹ひくもとなつた。年のころ三十七、八、猫背ねこぜで、獅子鼻ししはなで、反歯そっぱで、色が浅黒くツて、頬髯ほおひげが煩うるさそうに顔の半面を蔽おほつて、ちよつと見ると恐ろしい容貌ようぼう、若い女などは昼間出逢であつても気味悪く思うほどだが、それにも似合わず、眼には柔和なやさしいところがあつて、絶えず何物を見ても憧あこがれてゐるかのように見えた。足のコンパスは思い切つて広く、トットと小きざみに歩くその早さ！ 演習に朝出る兵隊さんもこれにはいつも三舎を避けた。

たいてい洋服で、それもスコツチの毛の摩すれてなくなつた鳶とびいろ色の古背広、上にはおつたインバネスも羊羹ようかんいろ色に黄ばんで、右の手には犬の頭のすぐ取れる安ステツキをつき、柄がらにない海老茶色えびちやいろの風呂敷包ふろしきみをかかえながら、左の手はポケットに入れている。

四よツ目垣めがきの外を通りかかると、

「今お出かけだ！」

と、田舎の角の植木屋の主婦が口の中で言った。

その植木屋も新建ちの一軒家で、売り物のひよる松やら檜かしやら黄楊つげやら八ツ手やらがその周囲にだらしなく植え付けられてあるが、その向こうには千駄谷の街道を持つてゐる新

開の屋敷町が参差として連なつて、二階のガラス窓には朝日の光がきらきらと輝き渡つた。左は角筈つのはずの工場の幾棟、細い煙筒からはもう労働に取りかかった朝の煙がくろく低く靡なびいている。晴れた空には林を越して電信柱が頭だけ見える。

男はてくてくと歩いていく。

田畝を越すと、二間幅の石ころ道、柴垣しばがき、檜垣かしがき、要垣かなめがき、その絶え間絶え間にガラス障子、冠木門かぶきもん、ガス燈と順序よく並んでいて、庭の松に霜よけの繩なわのまだ取られずについているのも見える。一、二丁行くと千駄谷通りで、毎朝、演習の兵隊が駆け足で通つていくのに邂逅かいこうする。西洋人の大きな洋館、新築の医者いしやの構えの大きな門、駄菓子だがしを売る古い茅葺かやぶきの家、ここまで来ると、もう代々木の停留場の高い線路が見えて、新宿あたりで、ポーと電笛の鳴る音でも耳に入ると、男はその大きな体を先へのめらせて、見栄も何もかまわずに、一散に走るのが例だ。

今日もそこに来て耳を敲そまてたが、電車の来たような氣勢けいはいもないので、同じ歩調ですたすたと歩いていったが、高い線路に突き当たつて曲がる角で、ふと栗梅くりうめの縮緬ちりめんの羽織うぎをぞろりと着た恰好かっこうの好い庇ひさし髪がみの女の後ろ姿を見た。鶯うぐいす色のリボン、縹しゅちん珍ちんの鼻はな緒なわ、おろし立ての白足袋しろたび、それを見ると、もうその胸はなんとなくときめいて、そのくせ

どうのこうのと言うのでもないが、ただ嬉しく、そわそわして、その先へ追い越すのがな  
んだか惜しいような気がする様子である。男はこの女を既に見知っているので、少なくとも  
も五、六度はその女と同じ電車に乗ったことがある。それどころか、冬の寒い夕暮れ、わ  
ざわざ廻り路をしてその女の家を突き留めたことがある。千駄谷の田畝の西の隅で、櫛の  
木で取り囲んだ奥の大きな家、その総領嬢であることをよく知っている。眉の美しい、色  
の白い頬の豊かな、笑う時言うに言われぬ表情をその眉と眼との間にあらわす娘だ。

「もうどうしても二十二、三、学校に通っているのではなし……それは毎朝逢わぬのでも  
わかるが、それにしてもどこへ行くのだろう」と思ったが、その思ったのが既に愉快なの  
で、眼の前にちらつく美しい着物の色彩が言い知らず胸をそそる。「もう嫁に行くんだろ  
う?」と続いて思ったが、今度はそれがなんだか侘しいような惜しいような気がして、

「己も今少し若ければ……」と二の矢を継いでたが、「なんだばかばかしい、己は幾歳だ、  
女房もあれば子供もある」と思い返した。思い返したが、なんとなく悲しい、なんとなく  
嬉しい。

代々木の停留場に上る階段のところ、それでも追い越して、衣ずれの音、白粉の香  
いに胸を躍らしたが、今度は振り返りもせず、大足に、しかも駆けるようにして、階段を

上った。

停留場の駅長が赤い回数切符を切つて返した。この駅長もその他の駅夫も皆この大男に熟している。せつがちで、あわて者で、早口であるということをも知っている。

板囲いの待合所に入ろうとして、男はまたその前に兼ねて見知り越しの女学生の立つているのをめぐとくも見た。

肉づきのいい、頬の桃色の、輪郭の丸い、それはかわいい娘だ。はでな縞物しまものに、海老茶はかまの袴はかまをはいて、右手に女持ちの細い蝙蝠傘こうもりがさ、左の手に、紫の風呂敷包みを抱えているが、今日はリボンがいつものと違つて白いと男はすぐ思った。

この娘は自分を忘れはすまい、むろん知つてる！ と続いて思った。そして娘の方を見たが、娘は知らぬ顔をして、あつちを向いている。あのくらいのうちは恥ずかしいんだらう、と思うとたまらなくかわいくなつたらしい。見ぬようなふりをして幾度となく見る、しきりに見る。——そしてまた眼をそらして、今度は階段のところまで追い越した女の後ろ姿に見入った。

電車の来るのも知らぬというように——。

## 二

この娘は自分を忘れはすまいとこの男が思ったのは、理由のあることで、それにはおもしろいエピソードがあるのだ。この娘とはいつでも同時刻に代々木から電車に乗って、牛込まで行くので、以前からよくその姿を見知っていたが、それと違ってあえて口をきいたというのではない。ただ相対して乗っている、よく肥った娘だなアと思う。あの頬の肉の豊かなこと、乳の大きなこと、りっぱな娘だなどと続いている。それがたび重になると、笑顔の美しいことも、耳の下に小さい黒子のあることも、こみ合った電車の吊皮にすわりとのべた腕の白いことも、信濃町から同じ学校の女学生とおりおり邂逅してはすっぱに会話を交じゆることも、なにもかもよく知るようになって、どこの娘かしらん？ などとその家、その家庭が知りたくなる。

でもあとをつけるほど気にも入らなかつたとみえて、あえてそれを知ろうともしなかつたが、ある日のこと、男は例の帽子、例のインバネス、例の背広、例の靴で、例の道を例のごとく千駄谷の田畝にかかっていると、ふと前からその肥った娘が、羽織りの上に白い前懸けをだらしなくしめて、半ば解きかけた髪を右の手で押さえながら、友達らしい娘



と何ごとかを語り合いながら歩いてきた。いつも逢う顔に違つたところで逢うと、なんだか他人でないような気がするものだが、男もそう思つたとみえて、もう少しで会釈をするような態度をして、急いだ歩調をはたと留めた。娘もちらとこつちを見て、これも、「あああの人だな、いつも電車に乗る人だな」と思つたらしかなかったが、会釈をするわけもないので、黙つてすれ違つてしまつた。男はすれ違いざまに、「今日は学校に行かぬのかしらん？　そうか、試験休みか春休みか」と我知らず口に出して言つて、五、六間無意識にくてくと歩いていくと、ふと黒い柔かい美しい春の土に、ちようど金屏風きんびょうぶに銀で画かいた松の葉のようにそつと落ちてゐるアルミニウムの留針ピン。

娘のだ！

いきなり、振り返つて、大きな声で、

「もし、もし、もし」

と連呼した。

娘はまだ十間ほど行つたばかりだから、むろんこの声は耳に入ったのであるが、今すれ違つた大男に声をかけられるとは思わぬので、振り返りもせず、友達の娘と肩を並べて静かに語りながら歩いていく。朝日が美しく野の農夫の鋤すきの刃に光る。

「もし、もし、もし」

と男は韻を押んだように再び叫んだ。

で、娘も振り返る。見るとその男は両手を高く挙げて、こつちを向いておもしろい恰好かっこをしている。ふと、気がついて、頭に手をやると、留針ピンがない。はっと思つて、「あら、私、嫌いやよ、留針を落としてよ」と友達に言うでもなく言つて、そのまま、ばたばたとかけ出した。

男は手を挙げたまま、そのアルミニウムの留針を持って待っている。娘はいきせき駆けてくる。やがてそばに近寄つた。

「どうもありがとう……」

と、娘は恥ずかしそうに顔を赧あかくして、礼を言つた。四角の輪廓をした大きな顔は、さも嬉しそうににこにここと笑つて、娘の白い美しい手にその留針を渡した。

「どうもありがとうございました」

と、再びいいねいに娘は礼を述べて、そして踵きびすをめぐらした。

男は嬉しくてしかたがない。愉快でたまらない。これであの娘、己おれの顔を見覚えたナ……と思う。これから電車で邂かいこう逅しても、あの人が私の留針を拾ってくれた人だと思つたに

相違ない。もし己が年が若くって、娘が今少し別嬪べっぴんで、それでこういう幕を演ずると、おもしろい小説ができるんだなどと、とりとめもないことを種々に考える。聯想れんそうは聯想を生んで、その身のいたずらに青年時代を浪費してしまったことや、恋人で娶めとつた細君の老いてしまったことや、子供の多いことや、自分の生活の荒涼としていっていることや、時勢におくれて将来に発達の見込みのないことや、いろいろなことが乱れた糸のように纏もつれ合つて、こんがらがって、ほとんど際限がない。ふと、その勤めている某雑誌社のむずかしい編集へんしゅう長の顔が空想の中にありありと浮かんだ。と、急に空想を捨てて路を急ぎ出した。

三

この男はどこから来るかと言うと、千駄谷せんだがやの田畝たんぼを越して、櫟くぬぎの並木の向こうを通つて、新建ちのりっぱな邸宅の門をつらねている間を抜けて、牛の鳴き声の聞こえる牧場、櫟かしの大樹に連なっている小径こみち——その向こうをだらだらと下つた丘陵おかの蔭かげの一軒家、毎朝かれはそこから出てくるので、丈たけの低い要垣かなめがきを周囲に取りまわして、三間くらいと思

われる家の構造、床の低いのと屋根の低いのを見ても、貸家建ての粗雑な普請であることがわかる。小さな門を中に入らなくとも、路から庭や座敷がすっかり見えて、篠竹の五、六本生えている下に、沈丁花の小さいのが二、三株咲いているが、そのそばには鉢植えの花ものが五つ六つだらしなく並べられてある。細君らしい二十五、六の女がかいがいしく襷掛けになって働いていると、四歳くらいの男の児と六歳くらいの女の児とが、座敷の次の間の縁側の日当たりの好いところに出て、しきりに何ごとをか言つて遊んでゐる。

家の南側に、釣瓶を伏せた井戸があるが、十時ころになると、天気さえよければ、細君はそこに盥を持ち出して、しきりに洗濯をやる。着物を洗う水の音がぎぶぎぶとのどかに聞こえて、隣の白蓮の美しく春の日に光るのが、なんとも言えぬ平和な趣をあたりに展げる。細君はなるほどもう色は衰えているが、娘盛りにはこれでも十人並み以上であったろうと思われる。やや旧派の束髪に結つて、ふつくりとした前髪を取つてあるが、着物は木綿の縞物を着て、海老茶色の帯の末端が地について、帯揚げのところ、洗濯の手を動かすたびにかすかに揺く。しばらくすると、末の男の児が、かアちゃんかアちゃんと遠くから呼んできて、そばに來ると、いきなり懐の乳を探つた。まアお待ちよと言つた

が、なかなか言うことを聞きそうにもないので、洗濯の手を前垂れでそそくさと拭いて、前の縁側に腰をかけて、子供を抱いてやった。そこへ総領の女の児も来て立っている。

客間兼帯の書齋は六畳で、ガラスの嵌まった小さい西洋書箱が西の壁につけて置かれて、栗の木の机がそれと反対の側に据えられている。床の間には春蘭の鉢が置かれて、幅物は偽物の文晁の山水だ。春の日が室の中までさし込むので、実に暖かい、気持ちが好い。机の上には二、三の雑誌、硯箱は能代塗りの黄いろい木地の木目が出ているもの、そしてそこに社の原稿紙らしい紙が春風に吹かれている。

この主人公は名を杉田古城と行って言うまでもなく文学者。若いころには、相応に名も出て、二、三の作品はずいぶん喝采されたこともある。いや、三十七歳の今日、こうしてつまらぬ雑誌社の社員になって、毎日毎日通って行って、つまらぬ雑誌の校正までして、平凡に文壇の地平線以下に沈没してしまおうとはみずからも思わなかったであろうし、人も思わなかった。けれどこうなつたのには原因がある。この男は昔からそうだが、どうも若い女に憧れるという悪い癖がある。若い美しい女を見ると、平生は割合に鋭い観察眼もすつかり権威を失ってしまう。若い時分、盛んにいわゆる少女小説を書いて、一時はずいぶん青年を魅せしめたものだが、観察も思想もないあくがれ小説がそういつまで人に飽き

られずにいることができよう。ついにはこの男と少女ということが文壇の笑い草の種となつて、書く小説も文章も皆笑い声の中に没却されてしまった。それに、その容貌ようぼうが前にも言ったとおり、このうえもなく蠢ぼんカラなので、いよいよそれが好いコントラストをなして、あの顔で、どうしてあであらう、打ち見たところは、いかな猛獣とでも闘たたかうというよきな風采と体格とを持つているのに……。これも造化の戯れの一つであらうという評判であつた。

ある時、友人間でその噂うわさがあつた時、一人は言った。

「どうも不思議だ。一種の病気かもしれんよ。先生のはただ、あくがれるというばかりなのだからね。美しいと思う、ただそれだけなのだ。我々なら、そういう時には、すぐ本能の力が首を出してきて、ただ、あくがれるくらいではどうしても満足ができませんがね」

「そうとも、生理的に、どこか陥落ロストしているんじゃないかしらん」と言つたものがある。

「生理的と言うよりも性質じゃないかしらん」

「いや、僕はそうは思わん。先生、若い時分、あまりにほしいままなことをしたんじゃないかと思うね」

「ほしいままとは？」

「言わずともわかるじやないか……。ひとりであまり身を傷つけたのさ。その習慣が長く続くと、生理的に、ある方面がロストしてしまつて、肉と霊とがしっくり合わんそうだ」

「ばかな……」

と笑つたものがある。

「だつて、子供ができるじやないか」

と誰かが言つた。

「それは子供はできるさ……。」と前の男は受けて、「僕は医者に聞いたんだが、その結果はいろいろあるそうだ。はげしいのは、生殖の途みちが絶たれてしまうそうだが、中には先生のようなものもあるということだ。よく例があるつて……。僕にいろいろ教えてくれたよ。僕はきつとそうだと思う。僕の鑑定は誤らんさ」

「僕は性質だと思うがね」

「いや、病氣ですよ、少し海岸にでも行っていい空気でも吸つて、節慾しなければいかんと思う」

「だつて、あまりおかしい、それも十八、九とか二十二、三とかなら、そういうこともあ

るかもしれんが、細君があつて、子供が二人まであつて、そして年は三十八にもなろうというんじゃないか。君の言うことは生理学万能で、どうも断定すぎるよ」

「いや、それは説明ができる。十八、九でなければそういうことはあるまいと言うけれど、それはいくらかもある。先生、きつと今でもやっているに相違ない。若い時、ああいうふうで、むやみに恋愛神聖論者を氣どつて、口ではきれいなことを言つていても、本能が承知しないから、ついみずから傷つけて快を取るといふようなことになる。そしてそれが習慣になると、病的になつて、本能の充分の働きをすることができなくなる。先生のはきつとそれだ。つまり、前にも言つたが、肉と靈とがしつくり調和することができんのだよ。それにしてもおもしろいじゃないか、健全をもつてみずからも任じ、人も許していたものが、今では不健全も不健全、デカダンの標本になつたのは、これというのも本能をないがしろにしたからだ。君たちは僕が本能万能説を抱いて<sup>いだ</sup>いるのをいつも攻撃するけれど、実際、人間は本能がたいせつだよ。本能に従わん奴<sup>やつ</sup>は生存しておられんさ」と滔々<sup>とうとう</sup>として弁じた。

#### 四



電車は代々木を出た。

春の朝は心地こころちが好い。日がうらうらと照り渡つて、空気はめずらしくくつきりと透すき徹とつている。富士の美しく霞かすんだ下に大きい櫟くぬぎ林ばやしが黒く並んで、千駄谷せんだがやの凹地くぼちに新築の家屋の参差しんしとして連なっているのが走馬燈のように早く行き過ぎる。けれどこの無言の自然よりも美しい少女の姿の方が好いので、男は前に相對した二人の娘の顔と姿とにほど魂を打ち込んでいた。けれど無言の自然を見るよりも活いきた人間を眺ながめるのは困難なもので、あまりしげしげ見て、悟られてはという気があるので、わきを見ているような顔をして、そして電いなずま光まのように早く鋭くながし眼を遣つかう。誰だか言つた、電車で女を見るのは正面ではあまりまばゆくつていけない、そうかと言つて、あまり離れてもきわだつて人に怪しまれる恐れがある、七分くらいに斜はすに対して座を占めるのが一番便利だと。男は少女にあくがれるのが病であるほどであるから、むろん、このくらいの秘訣ひけつは人に教わるまでもなく、自然にその呼吸を自覺していて、いつでもその便利な機会を攫つかむことを過あやまらない。

年上の方の娘の眼の表情がいかにも美しい。星——天上の星もこれに比べたならその光

を失うであろうと思われた。縮緬ちりめんのすらりとした膝ひざのあたりから、華奢きゃしゃな藤色の裾すそ、白足袋しろたびをつまだてた二三枚襲さんまいがさねの雪駄せつた、ことに色の白い襟首えりくびから、あのむっちりとした胸が高くなっているあたりが美しい乳房ちっぷさだと思つくと、総身そうみが搔かきむしられるような気がする。一人の肥ふとつた方の娘むとこは懐ふところからノートブックを出して、しきりにそれを読み始めた。すぐ千駄谷駅ちとせに来た。

かれの知りおる限りにおいては、ここから、少なくとも三人の少女が乗るのが例だ。けれど今日は、どうしたのか、時刻が後おくれたのか早いのか、見知つている三人の一人だも乗らぬ。その代わりに、それは不器量ぶきりような、二目とは見られぬような若い女が乗つた。この男は若い女なら、たいていな醜い顔にも、眼が好いとか、鼻が好いとか、色が白いか、襟首えりくびが美しいとか、膝の肥り具合が好いとか、何かしらの美を発見して、それを見て楽しむのであるが、今乗つた女は、さがしても、発見されるような美は一か所も持つておらなかつた。反歯そつぱ、ちぢれ毛、色黒、見ただけでも不愉快なのが、いきなりかれの隣に来て座を取つた。

信濃町しなのまちの停留場は、割合に乗る少女の少ないところで、かつて一度すばらしく美しい、華族の令嬢かと思われるような少女と膝を並べて牛込まで乗つた記憶があるばかり、その

後、今一度どうかして逢あいたいのもの、見たいものと願ねがっているけれど、今日までついぞかれの望は遂げられなかつた。電車は紳士やら軍人やら商人やら学生やらを多く載のせて、そして飛竜のごとく駛はしり出した。

トンネルを出て、電車の速力がやや緩ゆるくなったところから、かれはしきりに首を停車場の待合所の方に注いでいたが、ふと見馴みなれたリボンの色を見得たとみえて、その顔は晴れ晴れしく輝いて胸は躍おどつた。四ツ谷からお茶の水の高等女学校に通う十八歳くらいの少女、身装みなりもきれいに、ことにあでやかな容きりよう色、美しいといつてこれほど美しい娘は東京にもたくさんはあるまいと思われる。丈せいはすらりとしているし、眼は鈴を張つたようにぱっちりしているし、口は緊しまつて肉は瘦やせず肥ふとらず、晴れ晴れした顔には常に紅みなせが漲あふっている。今日はいにく乗客が多いので、そのまま扉のそばに立ったが、「こみ合いますから前方へ詰めてください」と車掌の言葉に余儀なくされて、男のすぐ前のところに来て、下げ皮に白い腕を延べた。男は立つて代わつてやりたいとは思わぬではないが、そうするとその白い腕が見られぬばかりではなく、上から見おろすのは、いかにも不便なので、そのまま席を立とうとしなかつた。

こみ合つた電車の中の美しい娘、これほどかれに興味深くうれしく感ぜられるものはな

いので、今までにも既に幾度となくその嬉しさを経験した。柔かい着物が触る。えならぬ香水のかおりがする。温かい肉の触感が言うに言われぬ思いをそそる。ことに、女の髪の毛においというものは、一種のはげしい望みを男に起こさせるもので、それがなんとも名状せられぬ愉快をかれに与えるのであった。

市谷いちがや、牛込うしごめ、飯田町と早く過ぎた。代々木から乗った娘は二人とも牛込でおりた。

電車は新陳代謝して、ますます混雑を極めるきわ。それにもかかわらず、かれは魂を失った人のように、前の美しい顔にのみあくがれ渡っている。

やがてお茶の水に着く。

## 五

この男の勤めている雑誌社は、神田かんだの錦町にしきちょうで、青年社という、正則英語学校のすぐ次の通りで、街道に面したガラス戸の前には、新刊の書籍の看板が五つ六つも並べられてあって、戸を開けて中に入ると、雑誌書籍のらちもなく取り散らされた室の帳場には社主のむずかしい顔が控えている。編集室へんしゅうしつは奥の二階で、十畳の一室、西と南とが塞がふさつ

ているので、陰気なことおびただしい。編集員の机が五脚ほど並べられてあるが、かれの机はその最も壁に近い暗いところで、雨の降る日などは、ランプがほしくらいである。

それに、電話がすぐそばにあるので、間断ひつきりなしに鳴つてくる電鈴が実に煩うるさい。先生、お茶の水から外濠線そとほりせんに乗り換えて錦町三丁目の角かどまで来ておけると、楽しかった空想はすっかり覚さめてしまったような侘わびしい気がして、編集長とその陰気な机とがすぐ眼に浮かぶ。今日も一日苦しまなければならぬかナアと思う。生活というものはつらいものだとすぐあとを続ける。と、この世も何も無いような厭いやな気になって、街道の塵埃じんあいが黄いろく眼の前に舞う。校正の穴埋めの厭いやなこと、雑誌の編集の無意味なることがありありと頭に浮かんでくる。ほとんど留め度がない。そればかりならまだいいが、半ば覚めてまだ覚め切らない電車の美しい影が、その侘わびしい黄いろい塵埃の間におぼつかなく見えて、それがなんだかこう自分の唯一の楽しみを破壊してしまうように思われるので、いよいよつらい。

編集長がまた皮肉な男で、人を冷やかすことをなんとも思わぬ。骨折つて美文でも書く、杉田君、またおのろけが出ましたねと突つ込む。なんぞという、少女を持ち出して笑われる。で、おりおりはむつとして、己おれは子供じゃない、三十七だ、人をばかにするにも程ほどがあると憤慨する。けれどそれはすぐ消えてしまうので、懲おこりすることもなく、艶つやつぽ

い歌を詠み、新体詩を作る。

すなわちかれの快樂というのは電車の中の美しい姿と、美文新体詩を作ること、社に  
いる間は、用事さえないと、原稿紙を延べて、一生懸命に美しい文を書いている。少女に  
関する感想の多いのはむろんのことだ。

その日は校正が多いので、先生一人それに忙殺されたが、午後二時ころ、少し片づいた  
ので一息吐いていると、

「杉田君」

と編集長が呼んだ。

「え？」

とそつちを向くと、

「君の近作を読みましたよ」と言つて、笑っている。

「そうですか」

「あいかわらず、美しいねえ、どうしてああきれいに書けるだろう。実際、君を好男子と  
思うのは無理はないよ。なんとかいう記者は、君の大きな体格を見て、その予想外なのに  
驚いたというからね」

「そうですかナ」

と、杉田はしかたなしに笑う。

「少女万歳ですな！」

と編集員の一人が相槌あいづちを打って冷やかした。

杉田はむっとしたが、くだらん奴やつを相手にしてもと思つて、他方わきを向いてしまった。実に癩しやくにさわる、三十七の己おれを冷やかす気が知れぬと思つた。

薄暗い陰気な室はどう考えてみても侘わしさに耐えかねて巻き煙草たばこを吸うと、青い紫の煙がすうと長く靡なびく。見つめてみると、代々木の娘、女学生、四谷の美しい姿などが、ごつちやになつて、縫もつれ合つて、それが一人の姿のように思われる。ばかばかしいと思わぬではないが、しかし愉快でないこともない様子だ。

午後三時過ぎ、退出時刻が近くなると、家のことを思う。妻のことを思う。つまらんな、年を老とつてしまったとつくづく慨嘆する。若い青年時代をくだらなく過とごして、今になつて後悔したとてなんの役にたつ、ほんとうにつまらないアと繰り返す。若い時に、なぜはげしい恋をしなかつた？ なぜ充分に肉のかおりをも嗅かがなかつた？ 今時分思つたとて、なんの反響がある？ もう三十七だ。こう思うと、気がいらいらして、髪の毛をむしりた

くなる。

社のガラス戸を開けて戸外に出る。終日の労働で頭脳はすっかり労れて、なんだか脳天が痛いような気がする。西風に舞い上がる黄いろい塵埃、侘しい、侘しい。なぜか今日はことさらに侘しくつらい。いくら美しい少女の髪に憧れたからって、もう自分らが恋をする時代ではない。また恋をしたいたって、美しい鳥を誘う羽翼をもう持つておらない。と思うと、もう生きている価値がない、死んだ方が好い、死んだ方が好い、死んだ方が好い、とかれは大きな体格を運びながら考えた。

顔色が悪い。眼の濁っているのはその心の暗いことを示している。妻や子供や平和な家庭のことを念頭に置かぬではないが、そんなことはもう非常に縁故が遠いように思われる。死んだ方が好い？ 死んだら、妻や子はどうする？ この念はもうかすかになつて、反響を与えぬほどその心は神経的に陥落してしまった。寂しき、寂しき、寂しき、この寂しさを救ってくれるものはないか、美しい姿の唯一つでいいから、白い腕にこの身を巻いてくれるものはないか。そうしたら、きつと復活する。希望、奮闘、勉強、必ずそこに生命を発見する。この濁った血が新しくなれると思う。けれどこの男は実際それによつて、新しい勇気を恢復することができるかどうかはもちろん疑問だ。



外濠そとぼりの電車が来たのでかれは乗った。敏捷びんしょうな眼はすぐ美しい着物の色を求めたが、あいにくそれにはかれの願いを満足させるようなものは乗っておらなかった。けれど電車に乗ったということだけで心が落ちついて、これからが——家に帰るまでが、自分の極楽境のように、気がゆつたりとなる。路側みちばたのさまざまの商店やら招牌かんぱんやらが走馬燈のよう眼の前を通るが、それがさまざまの美しい記憶を思い起こさせるので好い心地こころちがするのであった。

お茶の水から甲武線に乗り換えると、おりからの博覧会で電車はほとんど満員、それを無理に車掌のいる所に割り込んで、とにかく右の扉の外に立って、しっかりと真鍮しんちゆうの丸棒を攫つかんだ。ふと車中を見たかれははッとして驚いた。そのガラス窓を隔ててすぐそこに、信濃町しなのまちで同乗した、今一度ぜひ逢いたい、見たいと願っていた美しい令嬢が、中折れ帽や角帽やインバネスにほとんど圧おしつけられるようになって、ちようど鳥からすの群れに取り巻かれた鳩はとといったようなふうになって乗っている。

美しい眼、美しい手、美しい髪、どうして俗悪なこの世の中に、こんなきれいな娘がいるかと思う。誰の細君になるのだろう、誰の腕に巻かれるのであろうと思うと、たまらなく口惜しく情けなくなつてその結婚の日はいつだか知らぬが、その日は呪のろうべき日

だと思つた。白い襟首、黒い髪、鶯茶のリップン、白魚のようなきれいな指、宝石入りの金の指輪——乗客が混合つているのとガラス越しになつてゐるのを都合のよいことにして、かれは心ゆくまでその美しい姿に魂を打ち込んでしまった。

水道橋、飯田町、乗客はいよいよ多い。牛込に來ると、ほとんど車台の外に押し出されそうになつた。かれは真鍮の棒につかまつて、しかも眼を令嬢の姿から離さず、うつとりとしてみずからわれを忘れるというふうであつたが、市谷に來た時、また五、六の乗客があつたので、押しつけて押しかえしてはいるけれど、ややともすると、身が車外に突き出されそうになる。電線のうなりが遠くから聞こえてきて、なんとなくあたりが騒々しい。パイと発車の笛が鳴つて、車台が一、二間ほど出て、急にまたその速度が早められた時、どうした機会か少なくとも横にいた乗客の二、三が中心を失つて倒れかかつてきたためでもあるが、令嬢の美にうっとりとしていたかれの手が真鍮の棒から離れたと同時に、その大きな体はみごとにとんぼがえりを打つて、なんのことはない大きな毬のように、ころころと線路の上に転がり落ちた。危ないと車掌が絶叫したのも遅し早し、上りの電車が運悪く地を撼かしてやつてきたので、たちまちその黒い大きい一塊物は、あなやという間に、三、四間ずると引き摺られて、紅い血が一線長くレールを染めた。

非常警笛が空気を劈<sup>つんぎ</sup>いてけたたましく鳴った。



# 青空文庫情報

底本：「蒲団・一兵卒」角川文庫、角川書店

1969（昭和44）年10月20日改版初版発行

1974（昭和49）年11月30日改版8版発行

入力：久保あきら

校正：伊藤時也

2000年9月28日公開

2013年5月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 少女病

田山花袋

2020年 7月17日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>